

京都大学文学研究科博士後期課程3年 佐々木淳希

今回の派遣プログラムでは、コブレンツの連邦資料館における史料調査と、ハイデルベルク大学の Fuess 教授および彼が指導する院生、若手研究者との交流を行なった。派遣者は、指導教官である永原陽子教授と Fuess 教授が現在申請中の共同研究（日本学術振興会二国間交流事業）「グローバル化時代における困難な過去：ジェンダー・労働・シティズンシップ」において、労働の観点から共同研究に参加する予定となっている。今回の派遣を通じて、その共同研究に向けた事前調査を行うことができた。まず、コブレンツの連邦資料館では、労働社会省や内務省、首相府の史料を閲覧し、1970年代の西ドイツにおける外国人労働者（主にトルコ人）の処遇を政府がどのように考えていたのかをうかがい知ることのできる史料を入手した。続いてハイデルベルクでは、その調査をもとに Fuess 教授と面談し、共同研究における派遣者の役割、研究方針について助言を乞い、共同研究に限らず、派遣者が本来従事している労働をめぐる政治史研究についても有益なサジェッションを得ることができた。

このような経験によって、派遣者はコブレンツ連邦資料館の史料状況について概観することができ、今後の研究方針を定め、次回の調査活動を円滑に進めるうえで重要な知見を得ることができた。また、ハイデルベルク大学の教員や学生と交流を持つことができたことは、とても貴重な経験であった。修士課程の2年次にボン大学へ1年間留学した経験はあったが、当時はドイツ語能力も低く自身の研究も着手したばかりで十分に研究に関して議論を行うことはできなかったが、今回は自身の研究内容やハイデルベルク大学の学生たちの研究テーマについて議論を交わすことができ、研究分野における相互理解が深まったと感じられた。このことは前述の共同研究を実施するうえで、円滑なスタートを可能にし、相互の研究を密接に関連させた共同研究となることに寄与するものである。

ハイデルベルクでは、京都大学ヨーロッパセンターを訪れ、職員の方と国際的な研究活動について意見を交換することができ、現在京都大学とハイデルベルク大学が進めている交流活動について情報を得ることができた。来年度より実施予定の共同研究においては、ハイデルベルク大学でセミナーを開くことも予定されており、ヨーロッパセンターの活動内容を知ることができ、サポートを得られるということがわかったため、その点も円滑な共同研究の実施にとって重要であった。

このような経験によって、ドイツ現地で研究・調査活動を行うことのメリットを感じることで、今後も積極的にドイツへ留学する機会を探していきたいと考えるに至った。大学などの高等教育機関でドイツ政治史研究に従事することを希望しているため、自身の研究を深めるうえで今回の派遣活動は貴重なものであった。今後は、短期の調査旅行に限定せず、比較的長期にわたる留学や現地大学での研究に従事できるよう努力していきたい。